

2022年(令和4年)
4月20日
 第668号 (毎週水曜日発行)
 (株)高齢者住宅新聞社
 〒104-0061 東京都中央区銀座8-12-15
 ☎03-3543-6852(編集部)
 発行人 網谷敏敦
 年間購読料 23,100円(送料込・税込)
 ホームページ
<https://koureisha-jutaku.com>

認知症リスクを調査

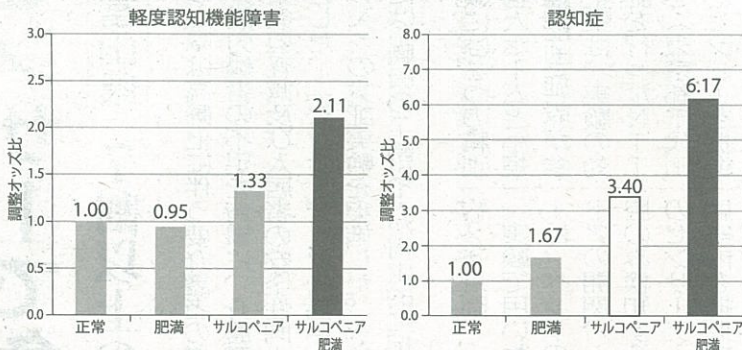
順大 握力とBMI測定で予測も



順天堂大学大学院医学研究科の研究グループが認知症に関する調査を実施。文京区在住高齢者1615名を対象とした調査により、肥満でかつ握力が弱い「サルコペニア肥満」の人では、軽度認知機能障害および認知症のリスクが高いという調査結果を15日に公表した。認知機能の低下をより早期に発見する方法として、握力とBMIという簡便な指標によるリスクの予測が有効である可能性を示した。

東京都文京区在住高齢者のコホート研究に参加した65〜84歳の高齢者1615名(男性684名・女性931名)を対象に身長・体重測定、握力測定、認知機能検査を実施。

図 肥満(BMI \geq 25kg/m²)とサルコペニア(握力低下)の状態と軽度認知機能障害(左)、認知症(右)の有病率との関係



年齢、性別、教育年数、日常生活活動量、高血圧症の有無、糖尿病の有無、脂質異常症の有無、うつ状態の有無で調整。肥満(BMI \geq 25kg/m²)とサルコペニア(握力低下)を有しているサルコペニア肥満は、両方とも該当しない正常と比べて、軽度認知機能障害のリスク(オッズ比)が約2倍、認知症のリスクが約6倍高い(黒色)。認知症に関しては、サルコペニア単独でも正常に比べて約3倍リスクが高い(白色)。

た。日本では高齢の肥満者で、骨格筋量と筋力の両方が低下してサルコペニアを合併している人はほぼいない。そのため、本研究では筋力低下のみを基準として用いた。握力が男性で28kg、女性で18.5kg未満を

また、年齢や教育歴、高血圧や糖尿病などの基礎疾患を調整し

た結果、サルコペニア肥満は、正常と比べて、軽度認知機能障害のリスクが約2倍、認知症のリスクが約6倍になることが示された。また、認知症では、サルコペニアだけでも通常の約3倍のリスクになることが明らかになった。握力やBMIといった簡便な方法によって、認知機能低下の早期発見に役立つことが示唆された一方で、サルコペニア肥満と認知機能低下が関連するメカニズムや、認知機能低下の原因など不明な点が多く残されている。研究チームでは今後さらなる研究を進めていくとしている。